

調査とコミュニティワーク : 島泊集落調査から

著者	高橋 信行
雑誌名	地域総合研究
巻	42
号	2
ページ	115-136
発行年	2015-03-30
URL	http://id.nii.ac.jp/1654/00000762/

調査とコミュニティワーカー島泊集落調査から

高橋 信行*

はじめに

2013年度より南大隅町と地域福祉推進についての委託（地域福祉計画策定の予備作業を含む）事業を含めた共同研究を行ってきた。地域福祉の基本理念には、「住み慣れた地域で安心して暮らす」ということがあり、そのために、在宅福祉の推進や地域住民の組織化が展開される必要がある。殊に過疎化と高齢化が進行する南大隅町にあつては、背景となる生活インフラ整備も重要なテーマとなる。

南大隅町は、2010年段階で高齢化率43.3%、鹿児島県で最も高齢化率の高い自治体である。集落単位でも、高齢化率が50%を超える集落を多く抱えている。2013年、こうした集落の中から島泊集落を対象にアンケート調査を実施させていただいた。島泊集落は高齢化率6割を超える過疎集落である。本研究では、集落の人々が、どのように日常生活を送り、どのような点に生活の困難さを抱えているのかを調べ、今後の南大隅町の地域福祉の推進を考えていく一助としていくものとさせていただいた。

1. 限界集落に関する議論

限界集落議論は地域福祉の推進という点からみても興味深いテーマである。限界集落議論は、農山村地域の人口や過疎化の進行が地域における集落機能や社会活動の低下を招き、特に存続が危ぶまれるような限界集落については集落機能の著しい低下や、農地・山村などの地域資源管理の問題が深刻化しているという事実認識に基づいている。（林他2006：1）

大野は、山村集落の「機能的要件」ともいうべき特徴を以下のように記述している。

山村の人びとは〈生産と生活〉の活動拠点を集落においている。この活動拠点となっている集落を構成しているのは家族〈実際は世帯〉である。この家族は家族周期、すなわち結婚期、育児期、教育期、子供の独立後の夫婦期、老後期のいずれかの段階にあり、このいずれかの段階にある家族が〈生産と生活〉にかかわる社会的共同・協力関係を相互に取り結び、有機的に結合している組織が現在の集落である。

この集落が集落として存続していくためには、集落の社会的共同生活を維持していく担い手が絶えず再生産されなければならない。すなわち、集落の維持には田役、道役などによる農道、生活道の維持・管理、冠婚葬祭の実施、集落運営の中核を担う区長、副区長、会計などの役職者の確保などが必

キーワード：過疎集落、限界集落、ソーシャル・アクション、アクション・リサーチ、地域福祉

* 本研究所所長・本学福祉社会学部教授

要であり、こうした〈生産と生活〉に関わる社会的共同・協力関係を維持していく担い手が絶えず集落内で再生産されなければならないのである。(大野2005: 21-22)

そして大野は集落を「存続集落」「準限界集落」「限界集落」「消滅集落」の4つに状態区分をしている。このうち、限界集落とは、「65歳以上の高齢者が集落人口の50%を超え、独居世帯が増加し、このため集落の共同活動の機能が低下し、社会的共同生活の維持が困難な状態にある集落」(大野2005: 22)をいう。

おそらく、過疎化と高齢化に伴って集落が衰退していく事実そのものについては、議論は以前からあったろうが、こうして、衰退の状態区分を行い、「限界集落」という概念に、操作的定義を行ったところから、限界集落に関わるさまざまな研究や論調(疑問を含め)がでてきたといえることができるだろう。

2. 誇りの空洞化と限界集落に生きる人々の「語り」の共有化の試み

限界集落対策の中でよく語られていることが物理的過疎化だけでなく、誇りの空洞化が進んでいるという指摘である。「地域住民がそこに住み続ける意味や誇りを喪失しつつある『誇りの空洞化』である」(小田切2007)。

小田切は、そうした「誇りの空洞化」の場面として以下のような事例を述べている。

ある山村では、独居高齢者の母が、年に1～2回の子ども達の帰省を待ちわびながらも、「うちの子には、ここには残って欲しくなかった」「ここで生まれた子どもがかわいそうだ」という。また、「若者定住」を力説する地域の経済団体の幹部は、別の場面では「いまの若い者は、こんなところでは住まない。都会に出るのが当たり前だろう」という。筆者はこうした場面に一再ならず遭遇しているが、そのたびに、地域の人々が地域に住み続ける意味や誇りを喪失しつつあると感じずにはいられない。それを「誇りの空洞化」と表現している。おそらく、高度成長期から現在まで続く山村地域からの流出は、所得格差のみならず、このような要因も加わった根深いものであると思われる。(小田切2007: 4-5)

そして地域再生の目標について、「『所得増大』や『若者定住』だけでなく、それらを含みつつも、より幅広い課題、すなわち『安心して、楽しく、少し豊かに、そして誇りを持ってくらす』という点にあることに気がつく。最近ではしばしば指摘されているように、地域再生には、住民の目線による『暮らしの視点』が欠かせない。このように『誇りの空洞化』に対抗する『誇りの再建』をも含む幅広い暮らしをめぐる課題に対応するプロセスが、『地域づくり』(地域再生)と考えられる」(小田切徳美2007: 4-5)としている¹。

1 集落の「誇りの空洞化」、「あきらめの意識」等の問題は以前から指摘されている。興味深い例は、鹿児島県十島村の研究を行った鳥越の指摘である。十島村は、屋久島と奄美大島の間に位置するトカラ列島からなっており、口之島、中之島、平島、諏訪之瀬島、悪石島、小宝島、宝島の有人七島と臥蛇島、小臥蛇島、小島、横当島、上ノ根島の無人島五島が南北162kmにおよぶ“日本一長い村”である。現在人口は、人口は665人(2014年11月現在)である。

1982年、鳥越皓之は、その著『トカラ列島社会の研究』(御茶の水書房)を出版し、その中で十島村の過疎問題について触れ、地域的特質として「生活の『実質』の喪失」と「構造的無責任体系」(構造的な責任の回避)とをあげている。

鳥越によれば、一方で、産業振興政策で、農業漁業に土木事業が取って代わることによって、「祭祀・共労組織の形骸化」と「仕事の意味の喪失」が顕在化し、それが、「生活の『実質』の喪失を産む。他方で、若者の流出と人口の高齢化によって、高齢者は、自分たちの地域について、明確な展望が持たなくなっており、具体的な将来計画について、考えにくくなる。これは個人としてはやむを得ないが、全体としてみれば、問題である。家族内での一番多いのが、「子供が内地で自立し、島内の親が老齢で働けなくなった段階で、親が内地に移動して子供の家庭と合併するという方式」である。個人としてはそれでよいのかもしれないが、島の地域全体のありようとしてはよくないだろうという。(鳥越1982: 150)

同様の問題意識から、具体的に集落に対して調査研究を試みた研究がある。この研究は集落をターゲットにした「アクションリサーチ的手法を用いた実践研究」とでも言えるものである。「限界集落に生きる人々の『語り』の共有化の試み—島根県雲南市掛合町の一集落を事例として—」と題するこの研究論文では、限界集落支援の方法として、「聞き書き文集プロジェクト」を企画し、実施している。この目的は、1つには集落住民の語りを通して、生きがいや地域の思いを調査すること（第1次調査）と、2つめには外部（研究者等）から新たなコミュニケーション通路を提供することが地域住民間に思いの共有化などの効果をもたらすかについて測定すること（第2次調査）である。1つめはいわば実態把握の手法であるが、2つめは効果測定に近い。集落住民の語りを文集化し、集落住民への文集作成の効果を測定したのである（江口他：2008）。

この文集プロジェクトから期待される効果として次の3つが想定されている。

（1）文集作成参加者個人への効果

人生・家族・生活についての様々な思いを、生き甲斐という切り口から言語化し、「文集」として可視化する。「文集」は文集作成の参加者自らにとっては自己確認のための道具となり、その人生のプロセスを省みることで自己肯定感の一助となることが期待される。

（2）家族への効果

「文集」は家族の目に触れる機会を提供する。そのことにより、家族内では家族間の理解を深め、各家族成員の心理的安定感等の上昇をもたらすことが期待される。

（3）地域社会への効果

「文集」は他の地域住民の目に触れる機会を提供する。それにより、集落内の他の住民の思いを新たに知ることで、地域内の連携を強め、その結果個人の孤立感の減少につながる機会になることが期待される。

この研究の結果では、まず、第1次調査によって作成された文集での住民の「語り」からわかったこととして、①中山間地域に住む人々の生き甲斐は、個人的志向のものよりも、むしろ他者との関係性を志向するものが多い。②地域への思いも強く、地域的愛着も強い。また貢献意欲も強い。③地域における高齢化の進行に伴い地域が抱える諸問題が増加している、をあげている。

具体的には、地域内諸施設の消滅、集落行事の維持の問題、移動の大変さ、雪かき、などが見られた。今後、現在の高齢者がより高齢化していくため、多く抱えている地域的問題を集落住民個人で処理していくことはますます困難になることが予想される。地域の多くの個人が抱える諸問題を解決するための援助として、自分自身で解決する「自助」、近隣住民で支えあう「互助」、自治体など公的機関が支援する「公助」が考えられるが、3つの援助の中では、高齢化の進行により特に高齢者の「自助」の部分が困難になっている。ただし、集落には、生き甲斐において他者との関係性は非常に大きな意味を持ち、他者とのかわりが強く地域への貢献意欲も高い住民が多い。これらのことから、集落内での住民間援助、すなわち「互助」がある程度期待できる状況であると述べる。

第2次調査の結果は以下のように整理している。

①文集作成の過程における「語り」によって、「自己確認」の効果がある程度見られた。②「家族」においては、夫婦間で地域の人々の思いを共有する効果が見られた。③「地域社会」における「文集」作成は、日常生活では可視化しにくい地域住民一人一人の「思い」を表面化させ、それを地域の他の人々と「共有化」する可能性をもたらす効果が見られた。（江口他：2008）

筆者は江口らが用いた手法、一方で集落の実態調査を行いながら、他方で、集落住民に集落の実態情報を提示しながら、住民の意識の変容を求めていくようなアクションリサーチともいうべき手法を参考に、

十島村の過疎を考えると、その原因に産業振興策があった点を考えると、単純に町おこしに産業振興をあげることに必要であることを感ぜずにはいられない。

南大隅町島泊集落調査研究を企画した。その経緯と結果について以下より述べていく。

3. 南大隅町過疎集落研究—島泊集落のケース

(1) 南大隅町の過疎化

南大隅町は、旧根占町と旧佐多町が平成17年に合併してできた自治体であり、大隅半島の南部、九州最南端の佐多岬を有している。南東側は大隅海峡、西側は鹿児島湾（錦江湾）に面しており、三方を海に囲まれた半島の先端の町であり、西には薩摩半島の指宿市、南には種子島、屋久島等がある。面積は214平方キロである。昭和25年に24,924人（旧根占、佐多両町合計）であった人口は、1960年代は年間500人ずつ減り続け、平成22年度8,815人まで落ち込んでいる。人口減少率は鹿児島県では最も著しいものだった。平成23年の高齢化率は43.3%であり、鹿児島県でも最も高齢化率の高い自治体となった。

また他の自治体からの通勤者、他の自治体への通勤者も多い。

表1 南大隅町人口と産業

人口総数	15歳未満	15～64歳	65歳以上人口	出生数	死亡数	転入者数	転出者数	世帯数	単独世帯数	高齢夫婦	単独世帯数
8,815	871	4,123	3,821	44	171	229	369	4,005	1,340	841	964
労働力人口	就業者数	完全失業者数	第1次産業就業者数	第2次産業就業者数	第3次産業就業者数	自町で従業している就業者数	他市区町村への通勤者数	従業地による就業者数	他市区町村からの通勤者数		
3,878	3,591	287	1,185	530	1,876	2,879	711	3,521	641		

「統計でみる市区町村のすがた」2013 総務省 より作成²

(2) 限界集落の増加と生活上の不安

全国的にみても、限界集落の量的な定義において、該当する地域が増加している。それは多くの過疎地域が抱える共通の課題であるが、南大隅町にその兆候がいち早く現れている。これらを脱するために行政としては「経済的基盤の確立」を第一義的にめざし、「産業振興」や「地域活性化」、そして「定住促進」を柱とした総合計画を策定している。これまでの調査からも孤独死不安の高さ、買い物等の利便性の悪さ等生活上の不安を訴える者が多い。別居子との連絡も少なく、こうした点からは南大隅町の地域福祉課題が見える。

少しデータは古いですが、2007年9月での南大隅町調べでは、佐多地区に高齢化率5割を超えた校区が4つある。佐多地区の島泊地域62.8%、大泊地域50.2%、郡地域57.7%、辺塚地域61.6%となっていた。

今回こうした地域の中から島泊地域を選び、地域福祉推進についての調査を計画した。（南大隅町2010）

(3) 島泊集落（校区）

島泊校区は、1973年発行の佐多町誌によると、伊座敷より西南へおよそ7.4キロメートル、バスで25分、太陽電池の無人灯台のある立目御崎と小場瀬を結ぶ海岸線に沿い、入江に小島をだき景色の明るく美しいところである。人家は海岸まで迫った山のふもとと海岸との間にぎっしり建てこんでいる。海岸まで山が迫りまとまった耕地は少なく、谷あいの田、山の段々畑が耕地の大部分である。気候は穏やかで霜も降りず亜熱帯植物が路地に繁茂しているとある。現在では、人家がだいぶ少なくなっている。

昭和10年頃まで鯖節製造が盛んで漁業を主としていたが、その後鯖の漁獲がなくなり、その後は農業を

2 統計局ホームページ <http://www.stat.go.jp/data/ssds/5b.htm>

主としていた。しかし耕地が狭いので男は海に出て沿岸漁業に従事し、漁閑期は山で製炭や薪とりに出て働き、女は牛とともに毎日田畑に出て働く。農業も適地適産にきりかえねばならぬ時期にきているし製炭の原木も、2, 3年で伐採しつくされているという状態であり、その上沿岸の水産物も年々減っていく傾向にあるので出稼ぎ就職者が年々増加している、としている。(佐多町1971)

先にも示したように、島泊の高齢化は急速に進み、農林漁業に従事している者も極端に減っている。小学校も廃校となっているが、廃校後も10年くらいは運動会が実施されていたという。集落行事については、規模を縮小しながらも一定数行われている。例えば平成23年度の自治会では、総会や役員会が複数回行われ、そのほか清掃作業、祭（祇園祭り、神社祭り、十五夜等）、駅伝避難訓練、グランドゴルフや体育大会、駅伝大会参加、など月1回以上の行事が行われている。



図1 南大隅町島泊地図（四角内）

4. 島泊集落調査とその結果について

（1）調査計画

今回の調査計画は、先の「限界集落に生きる人々の『語り』の共有化の試み」研究の手法に類似した方法を使いながら、3つの調査を企画している。一つは、20歳以上の住民を対象にした地域福祉や生活の困り事等についてアンケート用紙を使った調査である（A調査）。もう一つは島泊在住の高齢者へインタビューを使った質的調査（B調査）。これらは、島泊集落住民の地域福祉ニーズや生活上の課題等についての実態を把握することをねらったものである。

さらに、もう一つ、これらの結果を報告書にまとめ、これらを集落の全世帯に配布の上で、1ヶ月後くらいに再び報告書を読んだ感想等についてアンケート調査（C調査）を行った。これは、こうした質的、量的データを住民が理解することで、課題の共有、意識上の変化があるかどうかを知るためのものである。

(2) 地域福祉に関するアンケート調査 (A 調査)

1) アンケート調査の概要

アンケートの内容は、集落の生活環境について、健康や介護、買い物や交通の利便性、心配ごとややってほしいこと、交流の範囲や定住意識など幅広い内容であるが、全体で38問で構成されている。調査は、2013年6月15日と16日の2日間で実施したが、事前説明会（自治会員や民生委員20名ほどを対象にした）の折に、調査票を配布している人もおり、15日と16日は面接法によって、その場で調査を行ったケースとあらかじめ調査票に記入して頂いていたものを回収したケースが含まれる。20歳以上の方を対象としたが、全体のサンプル数119名のうち2名は非該当であったので、117名が総サンプルになる。その内65名から有効票を得ることができた。回収率は、55.6%である。以下よりはおもな調査結果について報告する。

2) 年齢、性別、家族形態、職業

今回のアンケート調査に答えてくださった方の平均年齢は、男性31名69.4歳、女性33名72.6歳である。全体平均71.1歳であった。回答者の年齢層は、若年層（20～39歳）1.6%、中年層（40～64歳）31.3%、前期高齢者（65～74歳）15.6%、後期高齢者（75歳以上）51.6%である。高齢者の割合は、68.2%である。島泊集落の全体の高齢化率61.4%（年）よりも若干高い割合と言える。

表 A-1 年齢カテゴリーと性別のクロス

			性 別		合 計
			男性	女性	
年齢カテゴリー	若年層（20歳～39歳）	度数 %	1 100.0%	0 .0%	1 100.0%
	中年層（40～64歳）	度数 %	11 55.0%	9 45.0%	20 100.0%
	前期高齢者層（65歳～74歳）	度数 %	5 50.0%	5 50.0%	10 100.0%
	後期高齢者層	度数 %	14 42.4%	19 57.6%	33 100.0%
合 計		度数 %	31 48.4%	33 51.6%	64 100.0%

家族形態は、ひとり暮らしが15.4%（10名）、夫婦のみが50.8%（33名）、夫婦と子どもが12.3%（8名）、三世代家族4.6%（3名）、その他16.9%（11名）となっており、半数は夫婦世帯であった。

現在の仕事では「無職」が6割を超える。ことに前期高齢者は70.0%、後期高齢者は84.8%である。

表 A-2 年齢と現在の仕事のクロス表

			職業									合計	
			農林漁業	商工業 自営業	事務職	販 売・ 労務職	専門職	専業主 婦（主 夫）	主婦で パート 内職	無職	その他		農林漁 業＋事 務職
年 齢	若年層	度数 %	0 .0%	0 .0%	0 .0%	0 .0%	0 .0%	0 .0%	0 .0%	0 .0%	1 100.0%	1 100.0%	
	中年層	度数 %	2 10.0%	0 .0%	1 5.0%	4 20.0%	1 5.0%	3 15.0%	1 5.0%	4 20.0%	4 20.0%	0 .0%	20 100.0%
	前期高 齢者層	度数 %	1 10.0%	0 .0%	0 .0%	0 .0%	0 .0%	1 10.0%	1 10.0%	7 70.0%	0 .0%	0 .0%	10 100.0%
	後期高 齢者層	度数 %	0 .0%	1 3.0%	0 .0%	1 3.0%	0 .0%	3 9.1%	0 .0%	28 84.8%	0 .0%	0 .0%	33 100.0%
	合計	度数 %	3 4.7%	1 1.6%	1 1.6%	5 7.8%	1 1.6%	7 10.9%	2 3.1%	39 60.9%	4 6.3%	1 1.6%	64 100.0%

過去の仕事を聞いた質問では、後期高齢者が農林漁業が半数近くあるが、前期高齢者では、むしろ販売労務職が多く、農林漁業は少ない。そして中年層になると再び農林漁業が多くなっている。

表 A-3 年齢と昔の仕事のクロス表

			過去の職業						合計
			農林漁業	商工業等の 自営業	事務職	販売・労 務職	専門職	専業主婦 (主夫)	
年齢	中年層	度数	3	0	1	1	0	0	5
		%	60.0%	.0%	20.0%	20.0%	.0%	.0%	100.0%
	前期高齢者層	度数	1	0	2	3	1	0	7
		%	14.3%	.0%	28.6%	42.9%	14.3%	.0%	100.0%
	後期高齢者層	度数	13	1	2	6	4	1	27
		%	48.1%	3.7%	7.4%	22.2%	14.8%	3.7%	100.0%
合 計		度数	17	1	5	10	5	1	39
		%	43.6%	2.6%	12.8%	25.6%	12.8%	2.6%	100.0%

3) 集落に住んで何年かと定住意識

集落に住んで何年かを聞いた質問では、31年以上とする者が全体で82.5%である。少し女性の方が短い傾向があるが、女性の場合、嫁いできたなどの事情があるのかもしれない。

表 A-4 性別と集落に住んで何年かのクロス表

			集落に住んで何年か					合計
			1年未満	1年～5年	6年～10年	11年～30年	31年以上	
性別	男性	度数	0	1	0	3	27	31
		%	.0%	3.2%	.0%	9.7%	87.1%	100.0%
	女性	度数	1	0	1	5	25	32
		%	3.1%	.0%	3.1%	15.6%	78.1%	100.0%
合 計		度数	1	1	1	8	52	63
		%	1.6%	1.6%	1.6%	12.7%	82.5%	100.0%

定住意識は全体で59.0%は「ぜひいつまでも住みたい」、29.5%は「なるべく住んでいたい」と答えているが、性別では女性の方がやや定住意識は低い傾向にある。「できれば移りたい」「ぜひ移りたい」と答えた人は5名いるが、すべて女性であった。

表 A-5 性別と定住意識のクロス表

			定住意識					合計
			ぜひいつまでも住みたい	なるべく住んでいたい	できれば移りたい	ぜひ移りたい	わからない	
性別	男性	度数	19	10	0	0	2	31
		%	61.3%	32.3%	.0%	.0%	6.5%	100.0%
	女性	度数	17	8	4	1	0	30
		%	56.7%	26.7%	13.3%	3.3%	.0%	100.0%
合 計		度数	36	18	4	1	2	61
		%	59.0%	29.5%	6.6%	1.6%	3.3%	100.0%

年齢でみると、やはり高齢者ほど定住意識は高いようである。

表 A-6 年齢カテゴリーと定住意識のクロス表

			定住意識					合計
			ぜひいつまでも住みたい	なるべく住んでいたい	できれば移りたい	ぜひ移りたい	わからない	
年齢カテゴリー	若年層（20歳から39歳）	度数 %	0 .0%	1 100.0%	0 .0%	0 .0%	0 .0%	1 100.0%
	中年層（40から64歳）	度数 %	9 45.0%	6 30.0%	2 10.0%	1 5.0%	2 10.0%	20 100.0%
	高齢者層（65歳以上）	度数 %	27 67.5%	11 27.5%	2 5.0%	0 .0%	0 .0%	40 100.0%
合 計			36 59.0%	18 29.5%	4 6.6%	1 1.6%	2 3.3%	61 100.0%

4) 外出と買い物

外出頻度は「ほぼ毎日」が15.4%、「週3～4日程度」が20.0%、「週1～2日程度」が29.2%、「1ヶ月1～3回」が20.0%、「ほとんどしない」が12.3%となっている。「ほぼ毎日」は女性より男性に多い。

表 A-7 性別と生活に必要な外出のクロス表

			生活に必要な外出						合計
			ほぼ毎日	週3～4日程度	週1～2日程度	1か月1～3回	ほとんどしない	わからない	
性別	男性	度数 %	7 22.6%	6 19.4%	8 25.8%	5 16.1%	4 12.9%	1 3.2%	31 100.0%
	女性	度数 %	3 8.8%	7 20.6%	11 32.4%	8 23.5%	4 11.8%	1 2.9%	34 100.0%
合 計			10 15.4%	13 20.0%	19 29.2%	13 20.0%	8 12.3%	2 3.1%	65 100.0%

家族形態でみると、ひとり暮らしの方の外出頻度が低く、「ほとんどしない」は30.0%（3名）になっている。

表 A-8 家族形態と生活に必要な外出のクロス表

			生活に必要な外出						合計
			ほぼ毎日	週3～4日程度	週1～2日程度	1か月1～3回	ほとんどしない	わからない	
家族形態	一人暮らし	度数 %	1 10.0%	2 20.0%	1 10.0%	3 30.0%	3 30.0%	0 .0%	10 100.0%
	夫婦のみ	度数 %	6 18.2%	4 12.1%	13 39.4%	6 18.2%	3 9.1%	1 3.0%	33 100.0%
	夫婦と子ども	度数 %	2 25.0%	2 25.0%	2 25.0%	1 12.5%	1 12.5%	0 .0%	8 100.0%
	三世代家族	度数 %	1 33.3%	0 .0%	1 33.3%	1 33.3%	0 .0%	0 .0%	3 100.0%
	その他	度数 %	0 .0%	5 45.5%	2 18.2%	2 18.2%	1 9.1%	1 9.1%	11 100.0%
合 計			10 15.4%	13 20.0%	19 29.2%	13 20.0%	8 12.3%	2 3.1%	65 100.0%

買い物の移動手段は「自分で運転する自家用車」をあげる者が最も多いが、特に男性の場合は、71.0%がこれをあげている。女性の場合は45.2%に下がるが、女性の場合、「家族や友人が運転する自家用車」に29.0%と男性の2倍言及されており、両方を合計すると、男性83.9%、女性74.2%とかなり近づく。そのほか、女性は、「徒歩・手押し車」が12.9%と多い（男性3.2%）。バスにも言及されているが、これは男

性3.2%，女性9.7%であり，利用率そのものは低い。

表 A-9 性別と買い物の移動手段のクロス表

			買い物の移動手段							合計
			自分で運転の自家用車	家族友人が運転の自家用車	自家用バイク	自転車	徒歩・手押し車	バス	その他	
性別	男性	度数 (%)	22 71.0%	4 12.9%	0 .0%	1 3.2%	1 3.2%	1 3.2%	2 6.5%	3 9.7%
	女性	度数 (%)	14 45.2%	9 29.0%	1 3.2%	1 3.2%	4 12.9%	3 9.7%	4 12.9%	0 .0%
合 計			36	13	1	2	5	4	6	3

近くにお店がないときの買い物は、「遠方の店まででかけていく」が最も多く57.1%，ついで「移動販売車を利用する」が33.3%，そして、「人に頼む」23.8%などが多い。特に男性は「遠方の店まで出かける」は女性より多く63.3%であるが、「移動販売車を利用する」や「人に頼む」は男性より女性の方が2倍ほどあり，男性は比較的少ない。

表 A-10 性別と近くにお店がない時の買い物

			性別		
			男性	女性	合計
近く到店がない時の買い物	人に頼む	度数	5	10	15
		%	16.7%	30.3%	23.8%
	業者に届けてもらう	度数	4	1	5
		%	13.3%	3.0%	7.9%
	カタログ販売	度数	0	1	1
		%	.0%	3.0%	1.6%
	移動販売車を利用する	度数	7	14	21
		%	23.3%	42.4%	33.3%
	遠方の店まで出かけていく	度数	19	17	36
		%	63.3%	51.5%	57.1%
	その他	度数	2	6	8
		%	6.7%	18.2%	12.7%
	合計	度数	30	33	63
		%	100.0%	100.0%	100.0%

年齢別で特徴的な点は，中年層の8割は「遠方の店まででかけていく」（若者層も一人だが同様）と答えているが，高齢者層では4割程度に落ち込む。

表 A-11 年齢と近くにお店がない時の買い物

			年齢カテゴリー			合計
			若年層 (20歳から39歳)	中年層 (40から64歳)	高齢者層 (65歳以上)	
近く到店がない時の買い物	人に頼む	度数	0	4	11	15
		%	.0%	20.0%	26.8%	24.2%
	業者に届けてもらう	度数	0	0	5	5
		%	.0%	.0%	12.2%	8.1%
	カタログ販売	度数	0	1	0	1
		%	.0%	5.0%	.0%	1.6%
	移動販売車を利用する	度数	0	7	14	21
		%	.0%	35.0%	34.1%	33.9%
	遠方の店まで出かけていく	度数	1	16	18	35
		%	100.0%	80.0%	43.9%	56.5%
	その他	度数	0	1	7	8
		%	.0%	5.0%	17.1%	12.9%
	合計	度数	1	20	41	62
		%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

5) 医療と介護

医療機関にかかっているかでは、全体で7割を超える人が通院していると答えており、性別では女性が80.6%と「通院している」人が多い。

年齢カテゴリーでは、高齢になるほど「通院している」は多くなる。高齢者層（65歳以上）の85.4%は通院していると答えている。

医療機関にかかっているという人に回数を聞いた質問では、平均で月に1.2回、中年層では0.8回、前期高齢者1.2回、後期高齢者1.3回となっている。

表 A-12 性別と医療機関にかかっているかのクロス表

			医療機関にかかっているか		合計
			通院している	通院していない	
性別	男性	度数	20	11	31
		%	64.5%	35.5%	100.0%
	女性	度数	25	6	31
		%	80.6%	19.4%	100.0%
合 計		度数	45	17	62
		%	72.6%	27.4%	100.0%

表 A-13 年齢カテゴリーと医療機関にかかっているかのクロス表

			医療機関にかかっているか		合計
			通院している	通院していない	
年齢カテゴリー	若年層（20歳から39歳）	度数	0	1	1
		%	.0%	100.0%	100.0%
	中年層（40から64歳）	度数	10	10	20
		%	50.0%	50.0%	100.0%
	高齢者層（65歳以上）	度数	35	6	41
		%	85.4%	14.6%	100.0%
合 計		度数	45	17	62
		%	72.6%	27.4%	100.0%

A-14 医療機関は月何回いくか^a

年齢カテゴリー	平均値	度数	標準偏差
中年層（40から64歳）	.810	10	.3107
前期高齢者層（65歳から74歳）	1.214	7	.8092
後期高齢者層	1.339	28	.6811
合計	1.202	45	.6638

a. 医療機関にかかっているか = 通院している

「もしも、ご自身に介護が必要になった場合、どこで介護を受けたいですか」（問29）で一番多いのは、33.9%で「現在の自宅」である。男女別でも男性35.5%、女性32.3%で「現在の自宅」が多い。次いで若干差はあるものの「施設」や「医療機関」が男女ともに多い。ただ他の調査等と比べると「現在の自宅」が3割代というのは低い気もする。

年齢層別では後期高齢者層は現在の自宅（45.2%）が多く、前期高齢者層は現在の自宅（30.0%）よりも施設（40.0%）の方が高い。施設と医療機関の部分を見ると、前期高齢者層以外の中年層・後期高齢者層は施設よりも医療機関の方が割合が高い。

表 A-15 性別と介護が必要になった場合どこでのクロス表

			介護が必要になった場合どこで								合計
			現在の 自宅	子ども の家	親族の 家	老人ホーム 等施設	老人ホーム + 病院	病院等の 医療機関	その他	わからない	
性別	男性	度数 %	11 35.5%	1 3.2%	1 3.2%	5 16.1%	1 3.2%	4 12.9%	2 6.5%	6 19.4%	31 100.0%
	女性	度数 %	10 32.3%	1 3.2%	1 3.2%	8 25.8%	1 3.2%	8 25.8%	0 .0%	2 6.5%	31 100.0%
合 計		度数 %	21 33.9%	2 3.2%	2 3.2%	13 21.0%	2 3.2%	12 19.4%	2 3.2%	8 12.9%	62 100.0%

表 A-16 年齢と介護が必要になった場合どこでのクロス表

			介護が必要になった場合どこで								合計
			現在の 自宅	子ども の家	親族の 家	老人ホーム 等施設	老人ホーム + 病院	病院等の 医療機関	その他	わからない	
年齢	若年層	度数 %	0 .0%	0 .0%	0 .0%	1 100.0%	0 .0%	0 .0%	0 .0%	0 .0%	1 100.0%
	中年層	度数 %	4 20.0%	1 5.0%	0 .0%	3 15.0%	0 .0%	4 20.0%	1 5.0%	7 35.0%	20 100.0%
	前期高 齢者層	度数 %	3 30.0%	0 .0%	2 20.0%	4 40.0%	0 .0%	1 10.0%	0 .0%	0 .0%	10 100.0%
	後期高 齢者層	度数 %	14 45.2%	1 3.2%	0 .0%	5 16.1%	2 6.5%	7 22.6%	1 3.2%	1 3.2%	31 100.0%
	合 計	度数 %	21 33.9%	2 3.2%	2 3.2%	13 21.0%	2 3.2%	12 19.4%	2 3.2%	8 12.9%	62 100.0%

6) 集落の環境評価

問30では、「あなたが住んでおられる集落の生活環境についての16項目について『よい』『ふつう』『悪い』『わからない』の中から各項目1つだけ選んで番号に○をつけて下さい」と聞いた。(ここでは「わからない」をのぞき、「よい」1点、「ふつう」2点、「悪い」3点を与えて、それぞれ平均を出した。全体的に見て、よい評価の項目は、「緑や自然環境」が1.29で最も良い評価であり、ついで1.42「街灯」、1.44「地域住民の人情や連帯感」、1.46「公民館・集会所」となっている。

悪い評価としては、「体の不自由な人が生活する環境」で2.63と「働く環境」、2.42「道路や交通の便」、「病院や診療所の利用や整備」となっている。

災害時の避難に関しては、一人暮らしの方で、一人で避難できると答えた人が4割しかいないことは、避難態勢について、地域全体で、考えてみる必要がありそうだ。

表 A-17 集落の環境評価

	度数	平均値
子育て環境	44	2.25
体の不自由な人が生活する環境	54	2.63
働く環境	54	2.63
緑や自然環境	58	1.29
街灯	57	1.42
公民館・集会所	56	1.46
健康づくりや憩いの場所	53	1.85
ゴミの処理のしやすさ	56	1.95
病院や診療所の利用や整備	57	2.33
防災対策	56	1.95
買い物などの便	57	2.39
福祉の施設やサービス	35	2.14
道路や交通の便	53	2.42
安全や治安の状態	56	1.55
地域住民の人情や連帯感	55	1.44
この地域の全体的住み心地	57	1.63

7) 日常生活の心配ごと

「日常生活で心配なことがありますか。該当するものにすべて○を付けて下さい」と聞いている（「その他」を含め15項目を提示）。全体を見ると「収入が少ない」が全体の43.8%と最も多い。次いで「健康面がすぐれなかったり、病気がちである」21.9%、「最後を一人で迎えるのではないかと不安」20.3%の順である。また「外出時の転倒不安」17.2%、「家が老朽化している」「家事が大変である」なども15.6%と比較的多い。

表 A-18 日常生活の心配ごと

心配ごと	度数	%
健康がすぐれなかったり、病気がちである	14	21.9
介護を必要としている	7	10.9
頼れる人がいなく一人きりである	3	4.7
収入が少ない	28	43.8
家事が大変である	10	15.6
外出時の転倒や事故	11	17.2
財産や墓の管理	4	6.3
金銭管理が苦手である	3	4.7
人との付き合いがうまくいかない	2	3.1
子どもや孫のこと	9	14.1
子育て	0	0.0
社会の仕組みがわかりにくい	7	10.9
悪質な訪問販売や投資犯罪に巻き込まれた、巻き込まれている	4	6.3
家が老朽化している	10	15.6
最期を一人で迎えるのではないかと不安	13	20.3
その他	6	9.4
合計	52	81.3
総数	64	100.0

※割合は総数64人に対する割合を示した。

(13) 日常生活の要望

「日常生活の中であなた自身がやってほしいことがあれば、以下の中からすべて○をつけてください。(その他を含め、19項目を提示して選んでもらっている。)」と聞いているが、項目にはなかったが、19項目のどれも選んでいない人を「要望なし」としてまとめている。

全体として、「要望なし」は59.4%であり、4割程度の人は、「やってほしいこと」をあげている。その中で最も多かったのが、「大掃除」で12.5%、「ちょっとした家の補修」10.9%、あとは10%満たないが、「台風時の戸締まり」9.4%、「廃品の回収」9.4%、「ご近所からの声かけ」も9.4%となっている。

性別でみると、男性は「ご近所からの声掛け」が12.9%で女性の倍あるが、そのほか「買い物支援」、「布団干し」といった家事面で手伝ってほしいが多いのがわかる。それに対し、女性は「台風時の戸締まり」や「大掃除」「ゴミ出しの手伝い」といった力仕事、あるいは日曜大工的なことを必要としているようだ。

表 A-19 日常生活の要望と性別のクロス表

		性別					
		男性		女性		合計	
		度数	%	度数	%	度数	%
要望	要望なし	19	61.3%	19	57.6%	38	59.4%
	ゴミ出しの手伝い	1	3.2%	4	12.1%	5	7.8%
	病院からの薬の受け取り	1	3.2%	2	6.1%	3	4.7%
	台風時の戸締り	1	3.2%	5	15.2%	6	9.4%
	外出時の支援	0	.0%	2	6.1%	2	3.1%
	ペットの世話	0	.0%	0	.0%	0	.0%
	ちょっとした家の補修	3	9.7%	4	12.1%	7	10.9%
	大掃除	3	9.7%	5	15.2%	8	12.5%
	ちょっとした家電に修理や配線の点検	2	6.5%	2	6.1%	4	6.3%
	ちょっとした水道の補修	2	6.5%	2	6.1%	4	6.3%
	山や畑の管理	1	3.2%	0	.0%	1	1.6%
	その他手伝いしてほしいこと	2	6.5%	0	.0%	2	3.1%
	電球の取り換え	1	3.2%	4	12.1%	5	7.8%
	ご近所の方からの声掛け	4	12.9%	2	6.1%	6	9.4%
	買い物支援	3	9.7%	1	3.0%	4	6.3%
	庭・植木鉢の散水や剪定や草取り	2	6.5%	2	6.1%	4	6.3%
	布団干し	2	6.5%	0	.0%	2	3.1%
	郵便物の投函	1	3.2%	0	.0%	1	1.6%
	廃品の回収	3	9.7%	3	9.1%	6	9.4%
	散歩の手伝い	1	3.2%	0	.0%	1	1.6%
	合計	31	100.0%	33	100.0%	64	100.0%

(3) 質的高齢者インタビュー (B 調査)

インタビューは島泊に在住の高齢者のうちインタビューを承諾いただいた7名からお話を聞いた。実施時期は2013年6月15日～16日である。あらかじめインタビューガイドをつくり、以下のようなテーマについてお話を聞き、それらを録音し、逐語録を作成した。個別に逐語録を作成したが、公開をご了解いただいた1名分だけを公開した。これと別に7名分のインタビューをまとめて分析をして、要点を示した。インタビュアーは鹿児島国際大学生と社会人ボランティアである。

〈インタビューガイド〉

- ①子どもの頃の集落のようすや楽しかった思い出,
- ②学校の思い出, 家族の思い出
- ③家事や仕事をしていた頃の思い出

- ④今の生きがい
- ⑤今の生活での心配ごと
- ⑥これからの集落や地域に期待すること－こんな地域であってほしいなど－
- ⑦その他

〈高齢者の語りの要点〉

高齢者の語りの中には、量的調査の集落評価や生活上の不安を言葉として語っているものも多く見られる。

1) 子どものころ、昔の集落

①海の思い出

「海水浴の思い出」「海岸で鯖干し、今はとれなくなった」「かわみなやエビをとって塩を入れて食べた」「主食はサツマイモと魚」

②運動会、綱引きなど楽しかった

「綱引きを済ませたあとの大相撲、子どもはお菓子をもらっていた。今は全然しなくなったが」「運動会は海岸で、裸足でやった。青年団や婦人会が海岸をきれいにして場所を作った」「十五夜で綱引きを一それから相撲取り」

③楽しいことはあんまりなかった

「子どもの頃は楽しいことはなかった。家の手伝いに一生懸命だった」「勉強どころではなかった」「あまり楽しい思い出は、なかった」

④戦争のこと

「戦争で生まれ育った集落で生活できなかった」「兵隊さんも来て、恐ろしいことばかりだった」「戦争がすんでからも大変だった」

⑤その他

「子どもの頃、メジロとりが楽しみだった」「夕方になれば、集まり、話をした。楽しかった」

2) 貧しさ

「当時はみんな貧乏、決していい生活ではなかったが、魚がとれた。鯖干しを作った」「学校の思い出はあまりない。家庭が苦しかったから家の手伝いだった」「貧しさで学校には行けなかった」「兄弟が多く、貧しかった。学校にも貧しさのために十分行けなかった思いがある」「小中学は出たが、家が貧しく、高校にはいけなかった」「弟や妹などみんないて、朝早くから、相当苦労した」「若い人生はなかった」

3) 仕事

「仕事は楽しかった」「建設業でいいお金をとっていた」「建設会社で20年働いた。若かったから楽しかった」「出稼ぎで大工の仕事、田舎では仕事がないし」「友達に誘われて、出稼ぎ」「学校を出てからは護岸工事の仕事をしていた」「炭焼きを20年くらいやった」「女中奉公にいった。その後農家にお嫁に行った」「長男に嫁いでとても苦労した」「今は年金暮らし、若い頃はバスの運転手をしていた。交通局に勤めていて、定年になってここに帰ってきた」「仕事につく前に自衛隊に入隊した。自衛隊でたくさんの資格をとった」

4) 昔と今—子どもがいなくなった

「当時は子どもが多かったが今は少なくなった」「集落には昔は300人もいたが、現在は111人」「子どもも高校を卒業すると、出て行って帰ってこないから、人口は減る一方」「昔は200人もいたが、今は学校もないし、子どももいない」「子どもの声の聞けないのは寂しい」「中学生2人だけ」「妊婦さんも見ない」「昔は騒がしかったが、今は何も聞こえない。5時過ぎたら寂しい」

5) 生きがいや楽しみ—健康・サロンは楽しみ

「生きがいは健康を第一にしている」「体育館では60歳から70歳の人が月に1回お茶会（サロン）をしている。月に2, 3回くらいおもしろいことをしている。他所の人が来て、三味線や太鼓で賑やかだった。私たちは歩けないから見に行けなかった。今はゲートボールくらいしかすることがない」「サロンをするのが楽しみ」「病気をしないようにサロンなどに行ってわいわいするのが楽しいが、生きがいというほどのものはない」「今の生きがいは、仕事もできんからな 仕事ができるなら野菜作ったりしたい。畑があるから」「生きがいはゴルフ」「子ども、孫と会うのが楽しみ」

6) 地域での活動

「グランドゴルフをやる、老人会の会長で人集めに苦労した。花壇づくりは、岬マラソンの手伝いなどで、役場から協力依頼がある。なかなか役員のなり手がない」「自治会長や老人会長を経験した」「交流は旧小学校の前の木の下で」「ゲートボールの審判の免許もとった」「よそからの交流会もいい」

7) 不安—病気や寝たきりになったとき

「集落の多くの人はデイサービスを利用している。でも寝たきりになったら入れないし、入浴サービスはなかったかな」「買い物や病院が心配。病院が佐多の診療所だけになったし、急性の場合は鹿屋になる」ドクターヘリが体育館前に降りる。まとまった集落で隣近所に目が届く。山間部の散らばった集落なんかは心配もある」「特養まで車で10分。でも寝たきりにならないとはいれない。民間のものもあるけど年金では入れない。介護保険はあるけど利用していない」「お金は少し足りないが、誰か面倒を見てとはいえないけど病気になったら女房を買い物に連れて行けない」「心配は病気」「もしも病気になったらどうしようかと考える。奥さんの足が悪いし」

8) 希望—若い人がいれば、若い人の視点で

「若者はやっぱりいた方がいい」「年寄りが多いから、でも仕事がないと生活できない。若者がいれば子どもも生まれる」「調査をさせて頂いている学生たちに望んでいること→外からの目で情報提供してほしい。地域にいたら地域のことがわからなくなる」「今後この地域に期待すること—若い者が帰ってくるような魅力。そういう南大隅町になってほしい」「介護施設をつくってもらいたい」

9) 今の生活—ぴんぴんころりがいいけれど。交際費にもお金がかかる

「あんまり人には迷惑をかけないようにしたい」「ぴんぴんころりがいいけど、誰にも迷惑をかけないで逝くのは難しい。医者は焼酎をやめろというが楽しみがない」「訪問販売が来る。また電話の勧誘もある。それらをいりませんと断っている」「年金生活—食べることには不自由なし（菜園、畑がある）」「年金だけ、食べるだけなら、そんなにかからない。交際費にお金がかかる」「食費は自分で作ったり貰ったりするからあまりかからない」「外食はあまりしない。早く帰って自宅で食べた方がいい」「期待しても難しいだろうし、今までどおりでいい」「暗い話ばかりでなく明るい話題のある集落にしていきたい」

10) 交通の便一車が運転できないと…

「スクールバスに乗れるけど、帰りがない」「バスは1日4便程度」「車の運転のできない人は、人に病院に行くのもお願いしている。診療所に医師が来るときはバスを出してもらえるといい。自分のふるさだからここが一番いいと思っている」「足が使えない人はバスか身内の車になる」「車にいつまで乗れるかとも思う」「自分も車に乗って買い物に行く」「バスの時間帯が悪くて、うまく利用できていない」「食材を手近に買えればいいが、車を運転できないと何もできない」

11) 今の集落

「空き家も多い」「移動販売車も週2回来るけど」「移動販売車はいろいろ売っているが自分は一度も利用したことはない」「お店は2軒あるけど、おかずになるようなものはない」「ちょっと大きな病院というと鹿屋になる」「顔つきあわせて話ができる。ちょっと歩くとほとんど会う、出歩きのできる人は。声かけもやっている。班長で自分が配りものをしている。この集落は密集しているから」「ここにお墓がある。みんな毎日お墓に行くから」「男が亡くなって、女が残る」

12) 10年後の島泊一集落の限界点

「10年たったら、人がいなくなるのではないか」「10年後の島泊は不安でいっぱい」「集落に住む人のお互いがうまくいってこれればいい。この先10年でどうなるのかは心配」

13) 家族への思い

「奥さんと仲良くやっている」「奥さんと結婚しようと思ったのは働き手だったから」「妻も足が悪い」「子どもも遠くにいるから、鹿児島にいてほしいけど」「3人の子ども2人は遠方だが、1人は鹿児島にいる」

14) 友達のこと

「友達の世話をしている」「入院しているお友達の見舞いをした。励ましたが」「一人暮らしの友人の最期、声かけをすればよかった」

インタビューからわかることとして、集落が海岸線にそって立ち並んでいることから海や海岸を中心にしながら行事が行われていたということ、鯖節をしていたことは町誌にも出てくる。しかし子どもの頃の思い出には貧しさがあり、楽しさだけのものではなかったと言う点、そこから上の学校にも行けず、また集落内に仕事がなく、早々に出稼ぎ等の仕事に就き、家族を支えていかねばならなかった時代が見える。そこに第2次世界大戦での苦労が影を落とす。一度は外で仕事をし、その後集落に戻ってきた人も多いようだ。今と昔の違いで子どもがほとんどいなくなったことをあげる人が多い。子どもは集落の未来を暗示しているようにもみえる。将来の不安として病気になったり、ねたきりになることの懸念は高齢者に共通のものであろうが、交通の便や公共施設の少なさ、生活インフラの不足から、特にこの不安は大きくなっている。空き家が増えると集落の元気がなくなると言ったのは地域の民生委員の方だったが、10年後の集落を心配する声は大きい。まさに限界点にある集落であるのかもしれない。集落の方は顔と顔とをつきあわせる親密な関係であり、隣近所の助け合いはまだ生きているようだ。

これらの語りは、多くが量的調査の結果と共通していた。

5. 報告書作成後のアンケート調査（C 調査）―報告書の意味

（1）調査概要

島泊調査終了後、南大隅町民を対象にした報告会（2013年11月19日）や講演会（2014年2月15日）の中で、量的な調査の結果については報告を行った、調査結果について報告を聞いた島泊住民もいた。

島泊集落全体に対しては、2014年3月末に、全世帯に対して島泊地域福祉調査の報告書（量的調査結果とインタビュー調査の内容を掲載）をお配りした。そして、同年5月に、報告書をみてどのように感じたかなどの郵送調査を実施した。

島泊の住民の方に、島泊地域福祉調査の報告書をお配りし、それについての住民アンケートを行った。119名の方が対象であるが、有効票は25票であり、回収率は21.0%である。

（2）調査結果―単純集計

25名の方のうち5名は不明であるが、残りの20名の70.0%は65歳以上の高齢者であった。65歳未満が30.0%である。性別は4名は不明であるが、残りの21名中47.6%が男性、52.4%が女性である。

2013年の調査に参加された方（回答された方）は、21名中17名（81.0%）である。2013年の調査の回収率が55.6%であったので、今回の調査回答を寄せていただいた方は、やはり、調査に参加された方が多いということになる。今回の調査参加の動機付けに昨年の調査になっているのだろうと思う。

表 C-1 アンケート調査に参加されましたか

	度数	パーセント	有効パーセント
有効 参加した	17	68.0	81.0
参加していない	4	16.0	19.0
合計	21	84.0	100.0
欠損値 システム欠損値	4	16.0	
合計	25	100.0	

報告書を読んだ人は、21名中17名（81.0%）である。

表 C-2 報告書はお読みにになりましたか

	度数	パーセント	有効パーセント
有効 読んだ	17	68.0	81.0
読んでいない	4	16.0	19.0
合計	21	84.0	100.0
欠損値 システム欠損値	4	16.0	
合計	25	100.0	

「報告書について他の住民と話したか」では、21名中「話した」という人が14名（66.7%）となっている。

表 C-3 報告書について他の住民の方とお話になりましたか

	度数	パーセント	有効パーセント
有効 話した	14	56.0	66.7
話していない	7	28.0	33.3
合計	21	84.0	100.0
欠損値 システム欠損値	4	16.0	
合計	25	100.0	

報告書が「地域を見直すきっかけになりましたか」ときいたところでは、回答19名の方のうち、12名（63.2%）の方が「なった」と答えている。

表 C-4 地域を見直すきっかけになりましたか

度数		パーセント	有効パーセント	
有効	なった	12	48.0	63.2
	なっていない	7	28.0	36.8
	合計	19	76.0	100.0
欠損値 システム欠損値		6	24.0	
合計		25	100.0	

「これからの集落について考えるようになりましたか」という問いでは、回答19名のうち13名（68.4%）は、「なった」と答えている。

表 C-5 これからの集落について考えるようになりましたか

度数		パーセント	有効パーセント	
有効	なった	13	52.0	68.4
	なっていない	6	24.0	31.6
	合計	19	76.0	100.0
欠損値 システム欠損値		6	24.0	
合計		25	100.0	

その他ご意見をという問いでは、「島泊集落もなくなっていくような気がしました」という回答が1名あった。

（3）調査対象となった人とそうでない人の違い—クロス集計

調査に参加された方の場合、94.1%は、報告書をお読みになっているが、参加されていない方では、1名25.0%に過ぎなかった。

表 C-6 アンケート調査への参加と報告書はお読みになったかのクロス表

			報告書はお読みになりましたか。		合計
			読んだ	読んでいない	
アンケート調査 に参加されましたか。	参加した	度数	16	1	17
		%	94.1%	5.9%	100.0%
	参加していない	度数	1	3	4
		%	25.0%	75.0%	100.0%
合 計		度数	17	4	21
		%	81.0%	19.0%	100.0%

（4）報告書を読んだ人のその後—クロス集計

報告書を読んだ方のうち、82.4%の方は、報告書について他の人と話したと答えている。

表 C-7 報告書を読んだかと報告書について他の住民の方と話したかのクロス表

			報告書について他の住民の方と		合計
			話した	話していない	
報告書はお読みに なりましたか。	読んだ	度数	14	3	17
		%	82.4%	17.6%	100.0%
	読んでいない	度数	0	4	4
		%	.0%	100.0%	100.0%
合 計		度数	14	7	21
		%	66.7%	33.3%	100.0%

報告書を読んだ方のうち、70.6%の方は「地域を見直すきっかけになった」と答えている。

表 C-8 報告書はお読みにになりましたかと地域を見直すきっかけになりましたかのクロス表

			地域を見直すきっかけに		合計
			なった	なっていない	
報告書はお読みに なりましたか。	読んだ	度数	12	5	17
		%	70.6%	29.4%	100.0%
	読んでいない	度数	0	2	2
		%	.0%	100.0%	100.0%
合 計		度数	12	7	19
		%	63.2%	36.8%	100.0%

報告書を読んだ方のうち76.5%の方は、「これからの集落について考えるようになった」と答えている。

表 C-9 報告書を読んだかとこれからの集落について考えるようになったかのクロス表

			これからの集落について考えるように		合計
			なった	なっていない	
報告書はお読みに なりましたか。	読んだ	度数	13	4	17
		%	76.5%	23.5%	100.0%
	読んでいない	度数	0	2	2
		%	.0%	100.0%	100.0%
合 計		度数	13	6	19
		%	68.4%	31.6%	100.0%

アンケートに参加された方で報告書について他の住民と話された方は76.5%，参加していない方は1名、25.0%である。この1名は、報告書を読まれた方であろう。

表 C-10 アンケート調査への参加と報告書について他の住民の方とお話になったかのクロス表

			報告書について他の住民の方と		合計
			話した	話していない	
アンケート調査 に参加されまし たか。	参加した	度数	13	4	17
		%	76.5%	23.5%	100.0%
	参加していない	度数	1	3	4
		%	25.0%	75.0%	100.0%
合 計		度数	14	7	21
		%	66.7%	33.3%	100.0%

参加された方で地域を見直す結果になった方は68.8%である。

表 C-11 アンケート調査への参加と地域を見直すきっかけになりましたかのクロス表

			地域を見直すきっかけになりましたか。		合計
			なった	なっていない	
アンケート調査 に参加されまし たか。	参加した	度数	11	5	16
		%	68.8%	31.3%	100.0%
	参加していない	度数	1	2	3
		%	33.3%	66.7%	100.0%
合 計		度数	12	7	19
		%	63.2%	36.8%	100.0%

これからの集落について考えるようになったという方は、75.0%である。

表 C-12 アンケート調査への参加とこれからの集落について考えるようになったかのクロス表

			これからの集落について考えるように		合計
			なった	なっていない	
アンケート調査 に参加されまし たか。	参加した	度数	12	4	16
		%	75.0%	25.0%	100.0%
	参加していない	度数	1	2	3
		%	33.3%	66.7%	100.0%
合 計		度数	13	6	19
		%	68.4%	31.6%	100.0%

(5) C 調査総括

全体的に調査活動への参加が調査報告書を読むことにつながっていること、調査報告書を読むことが、地域を見直すきっかけとして、機能しているを感じさせるものがあつたが、調査への参加の促し、また地域を見直したことがどのような実践も結びつけられるかについては、未知数である。

今後は、調査活動が地域問題の共有化と見直しを促進し、それらが一定の地域福祉等についての事業や活動に結びついて行く過程を実践的に研究することができればと考えている。

6. その後のヒアリング

2014年11月ふたたび島泊地域を訪れ、住民1名から聞き取りを行った。その中で2軒あつたお店のうち1軒が減り、買い物等への不安が増したが、その後移動販売車が毎週金曜日にくることになった（増えた）など、買い物についてはある程度まかなえる状態になったとのことであつた。ただ認知症高齢者の中には訪問販売や電話販売でものを買ってしまう方がおり、それが心配である点、近隣の方が病気で倒れたり、入院、入所されると、まわりにいる高齢者も元気がなくなる点を懸念されていた。集落行事は、縮小しながらも継続的に行っているが、いつまで続けられるかなという将来に対する不安は口にされた。

町が進めている3つの地域福祉推進事業についてのご意見も聞いた。

(1) ふれあいサロンと介護予防事業

もともと地域の自主活動として社協などが後押しして進められたふれあいいいききサロンは、全国的に推進されている事業で、月に1, 2回、公民館等に高齢者や障害者が集い、話し合いの機会をもったり、ゲーム等を行ったりする活動である。現在、介護予防の視点から補助を受けながら進めているところも少なくない。しかし、介護予防として実施する限り、リハビリや機能維持・回復というコンセプトが含まれ、かえってやりにくくなったという声も聞く。ここでも高齢者には少々きつい体操等のプログラムが参加している人たちには負担になってきているという話をきいた。

(2) 「寄ろっ住も家」事業の今後

「寄ろっ住も家」事業とは、仲間が集い食事を一緒にしたり、宿泊したりと修学旅行気分を楽しむことによって、高齢者の方々の孤独感や不安を軽減しようとする南大隅町独自の事業であり、NHK放送にも取りあげられた。しかしここでも、役場がお膳立てをして、食生活改善委員や社協が関わってやるのがいいのか疑問であるとか、住民の自主的活動として長続きするか心配。2, 3人くらいの仲のいい人たちが家を泊まり合うくらいのイメージであり、災害時に集まるなら必然性もあるが、食べさせて、話をして、趣旨が違うのではないかという声も聞かれた。

(3) 有償ボランティア事業

3年前より鹿児島県と鹿児島県社会福祉協議会によって協力を推し進められている事業であるが、これについてもボランティアとしての社会資源の開発にもつながっていないし、有償性という中で要望等の掘り起こしも十分には行われていないということのようだった。

こうした南大隅町が推進する地域福祉事業についても一定のところでの評価を行っていくべきであろう。

7. 調査活動とコミュニティワーク

通常調査活動はデータ収集の方法として行われる。地域援助の手法としても、地域住民のニーズ把握のための方法として用いられる。ただコミュニティワークの分野では、しばしば、ソーシャル・アクションとしての調査の意義について語られる。

例えばイギリスの地域開発プロジェクト（CDP）では、こうした調査の側面が、コミュニティ・ワークと結び付いて機能している。この点を野村は、Lees や Greve の論文を引用しながら、次のように要約している。

彼らに共通しているのは、まずコミュニティ・ワーカーがリサーチの意味を解し、その専門家と協力すること、また、できればリサーチの能力を持つことの必要性の強調であり、それはワーカーが地域のニーズを把握するだけでなく、地域の人々に、近隣社会の問題に気づかせることによって、有効なソーシャル・アクションを促進することだという。そして政策決定に影響を与え、その実行を求め、さらにその結果の評価に至るまで、一方において住民と接触を保ちつつ、住民意識（福祉観）を高めて、よき圧力グループを形成し、他方行政機関と接触して、住民の要求に対し、より敏感に、かつ責任をもって対処するように働きかける。その基盤になるのがリサーチに裏付けられた要求の正当性なのである。リサーチとアクションと評価の三つの結合こそ CDP 成功の鍵であるとされる。

“コミュニティを組織する”すなわち、福祉意識を高めると共に連帯意識的地域感情を育てるという目的でのリサーチの重要性と、そのためにリサーチに加えられるべきもうひとつの要素は、住民自身を何らかの形でリサーチに参加させること、具体的にはデータの収集の過程に参加させることであるという。CDP においても、単にデータの収集の仕方をしただけとか、近隣社会の実情を知ったということ以上に、地域社会への参与（involvement）を刺激したことの効果の方がはるかに大であり、特に計画の始めの段階でかかわった者は、その後のアクション等においても動機付けが高まったといわれる。地域のニーズに自己を同一化させる程度が高まるからである。（野村1980：226）

日本において、地域福祉を含めた福祉計画策定時においては、必ず事前に大規模な調査が実施されるようになってきている。しかし、それらのデータがその後の福祉計画策定や地域福祉推進にどの程度積極的に援用されているのかと言え、大変心許ない状況と言える。

高齢者の福祉計画においては、しばしば20ページ以上のアンケート調査用紙に対象者は答えさせられ、その結果について十分周知されることはない。その結果、調査活動については、うんざりした気分になっている。私自身住民調査の中で、住民から「調査、調査と毎回するが、何もかわらんじゃないか」と怒鳴られたことがあったが、行政が「住民から話は聞いていますよ」ということだけを担保するための調査は、アリバイづくりの調査でしかないところもあるのではないかな。

調査活動を地域づくりの視点から見直し、そのためには、ソーシャルアクションとしての視点をより強

調する必要があるだろう。

おわりに

南大隅町島泊地区の調査は、限界点にある集落の実態と課題を明らかにすると同時に、そうした問題を住民自身に共有してもらうことを狙いとした。今後は、こうした点をさらにすすめ、ワークショップ等によって、新たな事業活動の創造や社会資源の発見に結びつけながら、地域福祉計画の策定をめざしていかねばならないだろう。

おわりに、調査にご協力いただいた、島泊集落の住民の皆様、また南大隅町役場、社会福祉協議会等関連団体の皆様にお礼を申し上げる。

文献

1. 林賢一他「平成17年度 限界集落における集落機能の実態等に関する調査」農村開発企画委員会2007
www.maff.go.jp/j/nousin/noukei/communit/pdf/18report.pdf (2015年1月3日参照)
2. 大野晃『山村環境社会学序説－現代山村の限界集落化と地域共同管理』農山漁村文化協会2005
3. 小田切徳美 アカデミア vol.83 2007 pp4-5
http://www.soumu.go.jp/main_sosiki/kenkyu/teizyu/pdf/080214_1_sil-2.pdf (2014年12月30日参照)
4. 江口貴康・片岡佳美・吹野卓「限界集落に生きる人々の『語り』の共有化の試み－島根県雲南市掛合町の一集落を事例として－」(島根大学法文学部)山陰研究(第1号)2008
5. 南大隅町ホームページ2014年1月3日参照 <http://www.town.minamiosumi.lg.jp/>
6. 南大隅町「南大隅町総合振興計画 後期基本計画」2010
7. 佐多町誌編集委員会「佐多町誌」文尚堂印刷所1971
8. 野村哲也『社会福祉調査論』新評社1980 p.226
9. Lees, R., Reserch and Community Work, Greve J. Reserch and The Community, in David Jones(ed.), Community work two, 1975.
10. 鳥越皓之『トカラ列島社会の研究』御茶の水書房1982